

あ” ？

Shoebill

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

美醜逆転世界に行った893気味の提督の話です。

ある日急に転属を告げられた提督は転属先に向かう途中でパラレルワールドの美醜逆転した元ブラック鎮守府の提督になります。

果たして提督は元の世界に帰ることはできるのでしょうか？また元ブラック鎮守府の艦娘を幸せ出来るでしょうか？

何も考えずにはじめました

東方の美醜逆転物読んで面白かったので、好きな艦これで書こうと思ったから書いている方がいらつしやって……いや、私も書く!!

【注意】

本作は艦これのキャラクターを知っている人を対象としています（知らなくても一応読めます）

目次

あ？	1
貴様らそれでもネームシップか！	
22	
たたき潰してくれるわ	41
：手加減できそうにないな	62
な、泣き止んでくれ	78
そこか	103

あゝ？

「本日をもって矢久佐提督は破瓜鎮守府へ転属とする」

「……あゝ？」

俺はここ点極鎮守府で提督をしている矢久佐提督だ、いやっていたの方が正しいか……
昨日、元帥の直接訪問で茶を出す暇もなく告げられた

「ていとく……ほ、本当に行っちゃうの？」

「あなた、逃げる気!!」

「なんで、なんで、なんで」

「すまない」

謝ることしかできない俺を事情を知っている数名の艦娘が引き留めようとする
訪問の際に応接室にいた艦娘たちだ。

残念なことに元帥の言葉は絶対である、誰がなんと言おうと…

提督になれたのは元帥の力が大きい。そして、何より俺は元帥に逆らえない…

「矢久佐提督ですね、こちらに」

「……はい。」

「急なことでわるい」

「………」

「………」

「………」

車の前で振り返り数名に頭を下げる

裏切られた目を俺に向ける艦娘たちに何も言うことができなかつた

黒塗りの車に乗せられ点極鎮守府を離れる

最後に艦娘全員に挨拶をしないと示しがつかないが、パニックを起こさないように一部の艦娘しかこの事態を知らないとのことだ

「憲兵は運転手ではないのですが、元帥の命令なので」

運転をしている奴が話しかけてくる

「……チツ……」

車中では沈黙が続く、ストレスと元帥の言った転属の意味を考えた疲れで睡魔が襲ってきた

「おい」

「はい、なんででしょうか。」

「破瓜鎮守府まであとどのくらい時間がかかる？」

「はい、ここからですとおそらく4時間ほどで到着します。」

「…あ、あー…仮眠をとる、到着十分前に起こせ」

「…はい、かしこまりました。」

「…は、どこだ？」

目が覚めたら見覚えのない場所にいた。とてもきれいなホテルのロビーのような場所だ

「目覚めましたか、おはようございます。」

車を運転していた奴が目の前に立っていたが、俺の記憶が正しければあいつは男だったはずだ面影とかの話ではないほどに似ている

「お前は誰だ」

「おや、忘れてしまいましたか？先ほどまで一緒に車に乗っていたじゃないですか」

「健平 翼だったか、中性的な名前だが出発時点ではお前ではなく男の憲兵だった」

「名前覚えていてくれたんですね、うれしいです。ですが、見間違いですよ最初から私でしたよ」

「現在、海軍の海軍特別警察隊は男1207名、女92名。そして健平 翼という名前は俺の記憶上、海軍特別警察隊の中にはいない」

「……あなたの記憶違いでは？記憶以外に何か証拠でも？」

「仮にお前が憲兵だったとして、なぜ装備がPDPなんだ？」

「それは最近変わっただけだよ」

「…そうだな最新のワルサーPDP、模造刀を一撃で折れるスラム弾が打てるもんなあ
……………貴様いい加減にした方がいいぞ」

「ツ…わかったよ、ごめんごめん。全部話すからその殺意に満ちた目で見ないでくれ、
シクシク」

「チツ。質問する、答えろ。お前は何者だ」

「神だよ」

「……………ここはどこだ」

「私の頭の中だよ」

「……………この後俺は破瓜鎮守府へ行けるのか」

「そうだよ」

「わかった、すぐ連れていけ」

「え…信じるのかい？私が神だということ」

「…お前が憲兵ではないことは最初から分かっていた。警戒をしていたのに俺の刀を取
られた、そして目を開けたらこんなところに連れてこられている。」

「君、なかなか眠らないからめんどくさくなって眠らせちゃった」

「……………悲しいかな。今のお前に俺はどうすることもできない」

「まあ、こちらとしても説明する手間が省けたというものだよ」

「わかったからさっさと連れていけ」

「いいけど今から行くのは君が元居た世界の破瓜鎮守府じゃないよ」

「…は？」

「そう、今から君が向かうのは美醜感覚が女性だけ逆転した世界だよ」

「なんだそれ」

「それじゃ、いつてらっしやいー」

「おい、まて」

「私の世界の救世主になれるのは君しかいないんだ、たのんだぞ」

「先ほどの性格から考えられないような緊迫した声で神に願うように言った言葉は誰も聞いていない」

「て…………チツ」

目の前が光った次の瞬間だった、俺はボロボロの正門の前に立っていた

「…破瓜鎮守府…」

廃墟の方がまだ立派と思わせるくらい年季の入った鎮守府がありやがる、とりあえず執務室に電話があるはずだから元帥に訳を聞こう

「チツ汚ねえ」

掃除されていない廊下に汚れ切った窓ガラス、艦娘はいないのか？掃除もせずは何をしている。

数分歩いたところで執務室前についた、しかしいないと思っていた艦娘の声が部屋の中から聞こえる

コンコンコン

「本日をもって破瓜鎮守府に着任する矢久佐提督だ」

「ひっ、い、今開けます」

「必要ない俺が開ける」ガチャ

扉の前には小汚い艦娘が腰を引いておびえていた、

「ひい、ご、ごめんなさい、提督様がお越しになるとは聞いていたのですが、な、なにも用意出来ず申し訳ございません。」

「お前は、”吹雪”か。まあいい、話は後だ電話はどこにある。」

とても吹雪とは思えないほどやつれている吹雪に驚きつつ、今は状況を把握することを優先した

「は、はい、電話でしたら、つ、机の上にあります」

カツカツと足音を立てながら執務室の中を歩き電話に手を伸ばす。本部にコールをかけるつながるまで時間がかかるのはいつものことだ

吹雪は青ざめて2〜3m離れている距離から見ても足が震えているのが分かる。

にしてもこの場所は

「不愉快だ」

オペレーターが元帥につないだ

「なんだ」

低い威圧感のある声だ

「突然の電話すみません、転属の理由を教えてくださいませんか、元帥閣下」

「矢久佐、お前のいる鎮守府は俗に言う元ブラック鎮守府だ。そしてその再建はお前が適任だと私が判断した」

「…吹雪、部屋から出るんだ」

小さな悲鳴の後に逃げるように頭を下げ部屋から出た

「なんだ、吹雪がいるのか」

「なんの真似だ貴様」

「あゝ」

「だますならもつとまともにしろ…神様さんよ」

「…なんでばれたのかしら」

「元帥につなぎなおせ」

「はい、元帥です」

「…」

「もしもーし」

「断る」

「断れないわよー」

「くそが」ガチャ

でかい溜息をした後に再度電話をかける

「…」

「…」

つながらない

「…」

「…」

つながらない

「…」

「…」

つながらない

e t e …

「チツ」

頼みの綱がもうない

ジジジジジジジジ、ジジジジジジジジ、ジジジジジジジ

ガチャ

「………はい、こちら破瓜鎮守府。矢久佐提督だ」

「もうわかったでしょ」

「…目的はなんだ」

「さつきも言ったけど」

「再建か」

「あらわかってるじゃない」

「…」

「何よ」

「目的を言え」

「…再建よ」

「…チツ、もういい」

「…」

「再建出来たら俺は元の世界に変えることができるのか？」

「そうね、それは約束するわ」

「わかった、最後に。お前のことは何と呼べばいい。神か？元帥か？」

「どっちでもいいわよ、じゃあ再建頑張ってね」

「…あああ」

ガチャ

「やるしかないのか」

独り言が出てしまうほど追い詰められている。

しかし、目標ができたのでとりあえずできることを優先しよう

「ピー……破瓜鎮守府に在籍している全艦娘に継ぐ。本日より破瓜鎮守府の提督を務める矢久佐提督だ、これより全体集合をかける。”フタヒトマルマル”に第一演習場に全艦娘集合すること」

「え……て、提督、が来る……の」

「きつと今回の提督は……」

「姉さんもう期待しても……」

「……チツ……何が提督だ」

「……出撃?……行かないと……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「吹雪、なんで演習場集合なのよ」

「わからないよ」

「あなた、執務室で会ったんじゃないの？」

「電話の場所聞かれただけですぐ部屋から出されたよ、柄が悪くて怖かったよ。前の提督とは違つて顔はかっこよかつたけど…」

「期待はしちやだめよ吹雪、男なんて私たちのことぼろ雑巾かなんかだと思つては
ずよ」

「そんなことないっばい、叢雲ちゃんはそんな考えをしないでほしいっばい」

「なんで全体集合で演習場を選ぶのよ」

「ぶんぶんしちやだめだよ大井っち」

「北上はもつと殺意を抑えるにや」

「次はどことなくそ野郎なのか…」

「…どうでもいいクマ…」

「吹雪はイケメンって言ってたよ！」

「そうですわね、誰かが殺したら近くで見てもいいかもしれませんわね」

「どのような方でしょうか、期待はしていませんが」

「賢明な判断やで鳳翔、どうせ顔の良さで提督の地位に就いたに違いないんや」

「…お腹が空きました…ごはんくれる人でしょうか？」

「赤城さん期待してはいけません」

あるのか？」ギロツ

「「「「!!」」」」」

小さい声で文句と暴言を吐いていた艦娘を呼び上げた、艦娘はともかく人間の聴覚で聞き取れるはずがない。とても思っている顔だな

『『死ね』などとほざいていたが、一体どのような訳だ?』

「…」

「どうした、言ってみろ」

「…お前のような奴は信用ならん。元帥の指示だがなんだかは知らんがお前の力はいらない。他の者もそう考えている」

「…そうかお前らは信用できん奴は殺すのか?」

「…」

「俺の解釈が間違っていないければここにいる全員が俺を殺したい。そして先ほど名前を上げた者は特にそう考えていると…わかった明日俺を殺す許可を与える」

「「「「!!」」」」」

「何がいい、殴り合いか?海上か?勝てる方を選べ」

「…」

「おい、答えろ殺すのだろ」

「……海上にするデース」

「演習形式、この場で第一艦隊を結成する旗艦”長門”続いて”金剛”龍驤”妙高”那智”不知火”、6対1、実弾又は演習弾を使用、勝利条件は相手艦隊の旗艦の轟沈判定、演習開始時間は○年△月□日マルキューマルマル。第一艦隊は第一倉庫にある資材の使用を許可する、明日に備えて準備するように。また有観客とし全員防波堤に集合することその際にローテーション表を配る。後で吹雪は俺のところに来るように。以上解散」

「よし、執務室に向かうぞ時間が惜しいから聞きたいことは歩きながらにしてくれ」

「…はい、なんで私なのですか？」

「初期艦だからだ」

「…な、なんで知っているのですか」

「信任は本部から”吹雪””叢雲””漣””電””五月雨”の中から初期艦を一人選ぶ、そしてこの鎮守府にいる駆逐艦の中でおそらく一番戦闘練度が高い」

「…失礼ですが駆逐艦で一番戦闘経験が高いのは”秋月”です」

「ああ、駆逐艦で一番強いのはおそらく、秋月」で間違いないだろう、しかしボロボロの擬装でなるべく効率的かつ効果的な運用を行っていた。資源がカツカツの状況で無理矢理出撃していたと予想したのだが」

「…」

「なんだ、違ったか？」

「……いえ」

執務室につきました、今回の提督は前の提督とは違い私たちのことを名前で呼んでくれます。そして恐ろしいまでの洞察力があるようです。

ですが私、私たちは見ての通り見るに堪えない不細工です。ほとんどの男の人は目を合わせてくれませんが、話は聞いてくれません、私たちは道具だと言ってきました。

少し前までは人権がない艦娘はまるで消耗品かのような運用をされていました。ドロップする駆逐艦などは補給をせずに解体が基本……思い出したくありません。

しかし元帥が変わってから艦娘にも『準人権』が与えられるようになり凄惨な事態は終わりを告げましたが前の提督はそれを無視して憲兵に連れて行かれました、元帥からの直接電話で新しい提督が来ると聞いたときは絶望しましたが艦娘は提督がいないとフルパワーで出撃、演習、遠征が行えません。出撃、演習、遠征が行えないと資材が貯まらず私たち艦娘は死んでしまいます…。言いたくありませんが私たちには提督がないと生きていけません。

長門さんが『提督はいらない』といったのは妖精の力なしで出撃、演習、遠征を行う覚悟があつて言ったことだと思います。

私は私たちは奴隷になるくらいなら自分たちの力で生きていく方が何倍もまし、と思う経験をしてきました。

「私たちに提督は必要ありません」

貴様らそれでもネームシップか！

「私たちに提督は必要ありません」

「お前もそれを言うのか？」

「殺したいほどではございませんが」提督「は信じていません。あなたもいやでしょう
私たちと働くのは」

「あ？いやだと？いやに決まっているだろう…」

「そうですねこんなぶs

「戦争が好きならなんていないだろ」

「…？…」

「俺は戦争が嫌いだ、そしてこの国を守りたい。最もこんな幼い少女を戦地に向かわせることにも抵抗があるのだが」

「…なぜですか？」

「俺はこの国が好きなんだ、元帥が救ったこの国が。」

「…違います、なぜ私たちを戦地に向かわせたくないのですか？」

「？…それは艦娘も一人の国民だからだが」

「ッ……なぜ私たちを人として扱ってくれるのですか?」

「なぜ?と言われても……さつきもそうだったが俺に対して怒っていただろう、それは感情を持つ生物しかできない行動だ。この鎮守府に来てからまだ一時間も経っていないが、俺に対しての殺意はすごいものだった。仲間を思っていることなのか、自分を守るためのものなのか、生きようと力を行使する者の感情だった。

それを人じゃないなんて言えないだろ」

「…」

「まあ、生きようとしているなら問題ない。吹雪、この鎮守府にいる艦娘の名前をこの紙に書いてくれ。それが終わったらもう帰って構わん」

「…はい……」 カキカキ

吹雪は全員の名前を書き納得のいかない顔つきで執務室を後にした…

「さて…………やることが多いな」

独り言を聞いて助っ人のつもりなのだろうか、あちこちから妖精が出てきた。妖精たちとの再建計画は次の日の朝まで続いた……

8 : 55

バシャーン バシャーン

「フツ、逃げなかったことは褒めてやる」

「人間が水上靴履いてマース」

「…」

ギャラリーもあいまって相当油断しているな

「吹雪、昨日呼ばれてたけど何かされたの？」

「何もされなかったよ、艦娘の名前を書いたただけだよ」

「そう、何かされたらすぐ言うのよ。その時は私の手であいつを殺すわ。まあ、あいつはこの演習で殺されるけど」

「怖いよ叢雲ちゃん」

8..58

「鐘の音が鳴ったらスタートだが、始まる前にひとついいか？」

「……?」

” 白旗の合図は主砲を海面に向ける” でいいのかわか?

「……ぷははは、何?我々が白旗だと?ふざけるなよ」

「…そうか。…わかった」

8..59

「貴様はその刀でどうするつもりだ?」

「これは逆刃刀だ、刃がついてる側では切らないから安心しろ」

「チツ、どこまでもなめやがって」

「…」

9 : 00 「ゴーン」

開始早々”長門”金剛”の砲撃、構えていたので避けるのは簡単だった。戦艦の砲撃の水柱から不知火が肉弾戦を仕掛けてきた、駆逐艦の機動性を生かし攻撃回転もさることながら重巡二人のための射線は確保している。戦艦次弾、至近弾の間を縫って死角から龍驤の戦闘機の攻撃、龍驤と俺の間には戦艦のどつちかが立ちふさがり低耐久の補助を行っている。妖精の力がないなりに立ち回りを考えている。しかし、殺すために特化した動きに近い。第一艦隊の作戦の関係上どの立場も欠けることができない、

”不知火”の攻撃は単純すぎる、最初の3、4モーションで以降の攻撃の予測がしやすい。”妙高”那智”は常に動いているから警戒しなければならぬが”不知火”に誤射しないため砲撃が慎重になりすぎだ。”龍驤”の戦闘機は死角を突くいい動きだが

低空飛行過ぎてエンジン音が聞こえて聴覚だけで感知ができるぞ。」

戦闘パターンが変わらずに2〜3分が過ぎた。さすがに動きっぱなしの不知火は疲れてきたようだ、目に見えて攻撃回転が落ちてきた。補うように重巡の砲撃、しかし攻撃回転が落ちた不知火にまわす回避行動が減った分、砲撃をかわすリソースをたくさん避ける

「短期決戦のつもりだったのか……作戦を建てる時間はたくさんあっただろう、俺が避けることは考えていなかったのか?」

「はあはあ、先ほどから聞いていれば。貴様など避けているだけではないか!」

動きの悪い不知火を避け少し遠くへ

逆刃刀を抜き

「これより反撃を開始する、戦意がないものは主砲を下げる」

私はなぜ引き下がらなかったのでしょうか。5分間海上で自分ができる最大出力そして最大回転数を難なくかわされ、正直一步も動けませんでした。そして提督の一言で私は蛇を前にした蛙のごとく恐怖で指一本いえ、まばたきすらできず次の瞬間には薄れゆく意識の中水面に倒れました。

分かっていたはずです。私たち姉妹のコンビネーションを持ってさえすれば意識のかく乱なんて簡単そんなことを考えていました、調子に乗っていたのかもかもしれません。ただただかわされている不知火ちゃんの助けもできず、終いには私たちより後ろにいた不知火ちゃんに先に行かれて、何もできず那智がやられて………作戦をもう少し練って考えていけば……いえ、それでも提督には勝てそうにはありませんね。

おかしいやろ。なんやあのスピードは、にげた思たら一秒足らずで三人をしとめて、発艦準備中に戦艦二人の間を抜けてウチを間合いにいれてってあの提督ほんまに人間か？

「どうした、打たないのか？殺すんだろ」

「…何者だ貴様」

「どっちだ殺したいのか？降参か？ほら、金剛は主砲下げたぞ」

「…」

「…」

「…：…万全の状態じゃなかった。作戦をもっとしっかり立てていれば。妖精の力があれば。…：…そうだな万全の状態で妖精の力を使ってちゃんとした作戦があればこんな無様な結果にはならなかった。今か？今反省をするのか、仲間がらやれて何もできなとわかったから？」

「…」

「…」

「立て、顔を上げろ」

「「ひっ」ビクッ」

「情けなく尻尾を巻いて引き下がるのか。戦艦長門 戦艦金剛貴様らそれでもネーム

シツプか！」

「ツ」

・

・

・

「自分の姉妹艦はドックへ連れて行ってやれ。残ったものに昨日言ったローテーションのプリントを配る。続いて任務は明日からとし。今日は、この鎮守府の掃除をする」

「「!!」」

「説明をするので食堂にヒトフタマルマルに集合するように」

「「…」」

「返事ッ」

「「っはい」」

「いったい何者なのよあいつ」

「…わからないよ……でも」

「でも?でも何?今度はいいやつだつて?」

「そ、そんなことは……」

「いい吹雪提督というのは私達とこき使う存在、そして今の私達には必要ない存在なの……私達を見てくれる人間なんて……」

「叢雲ちゃん……」

12:00 食堂にて

「これで全員か」

「…」

「なんだそのしけた面は。昨日の威勢はどうした？」

第一艦隊が俺の前に並んでいた、まだ殺意が消えていないが

「私たちは負けたんだ、好きに言え」

「言い訳を言わないだけましか…まあいい、次はもっとましな作戦を立てることだな」

「「?!」」

「なんだ？」

「わ、私たちは解体されるのではないのですか？」「私たちは提督を殺そうとしまシタ…許されるはずありません」

「……この汚い鎮守府を掃除するのには人手が必要だ、解体したい気持ちを抑えている。俺の気持ちが変わらないうちに次の作戦でも考えることだな」

「わかりまシタ…？」

「それでいい、それでは掃除を開始する」

「はい」

「食堂セクシオンリーダー」間宮、「ドックセクシオンリーダー」長門、「寮統括」金剛
、「駆逐艦寮セクシオンリーダー」秋月、「軽巡洋艦寮セクシオンリーダー」球磨、「重
巡洋艦寮セクシオンリーダー」妙高、「空母寮セクシオンリーダー」鳳翔、「戦艦寮セ
クシオンリーダー」大和、「清掃総括」吹雪。食堂、ドック、艦娘寮の清掃が終了次
第、「吹雪」は執務室へ報告に来到ること。鳳翔と間宮、伊良湖は少し話がある集まれ。こ
れより吹雪の指示に従うこと、以上」

車の中

「これ、経費落ちるのか?」

心配すぎて独り言が出てしまう、今向かっているのは近くの町……携帯で調べて2時

間、寮用で畳も500枚用意したし。5時間はかかる計算をしたのだが…

元ブラツク鎮守府と言っていたが部屋があそこまで汚いとは思わなかったな、ブラツク鎮守府の情報は前の鎮守府の時に何件か聞いた、元帥の力で速攻鎮圧されていたらしいが艦娘のメンタルケアがうまくいかないかなんかで困っていた…

提督が嫌いというより俺のことが嫌いという感情を感じる、なんもしてねえよ糞が。

「これ、ほんとに私達が使っているの？」

畳の山を見上げた叢雲が言い放った

「う、うん提督がこれで足りるだろうって」

「はあー。本当に何者なのよあいつ……てか、なんで人間のくせになんで水上靴で戦えたのよ」

「…私に聞かないでよ」

「まったく説明もなしに、今だって執務室にいないんでしょ?」

「そうみたい、さつきドック掃除の夕立ちちゃんがおつきい車で鎮守府から出て行っただけだよ」

「なんで夕立はあんな興奮してたのよ、はあー(クソデカタメイキ)」

「なんでも、運転してる姿がかっこよかったですか?」

「…(わからんでもないとは言えない)」

「ま、まったく夕立はおこちゃまね。ああいったイケメンは女をたくさん持っているのよ、私達にはなんも用はないわ。仕事だから仕方なく話しているだけよ」

「…」

「私は人間、いえ男は信用しないわ」

町に着き店を回っていて思っていることがある、ナンパされることはよくあるのだが美人だろうが化粧が厚かろうが大抵は軽くあしらっている。しかし、今日はビビりすぎてあしらうことができなかった。話しかけてきたのは、ブス！いやドブス！

…失礼、口が悪かった。人の容姿に文句を言うのはよくない…いやさつき声をかけてきたのは化粧をしていなかった、『お兄さん、二人でお茶しない？』冷や汗が出た、思い出してまた出できた。自分に自信があったのか？あれで？

俺は組の時に組長（元帥）に『もつとまともな男になれ』と言われ兄貴たちに筋トレ、髪の毛のセット、立ち振る舞い、脱毛、化粧などを叩き込まれた。寝起き・本家を出る前・寝る前なんて急いで30分はかかる…元帥どうしてるのかな？

いかんいかん、そんなことよりこの町はなぜかぶs…お顔のバランスが感覚的に不快な人が多い気がする、というより化粧をして不細工にしている感じがする。

確か、神（この世界の元帥）がパラレルワールドとか言っていたか。記憶が曖昧でいまいち、あの出来事のことを覚えていない。『○○な世界』だったような…最もパラレルワールドなのか異世界なのかはわからんが、ナンパの出来事、町の女性やぱつと見の男女比も含め対して影響はないと思える…うん、今は再建優先。

思ったより時間がかかってしまった。店員さんさすがに連絡先聞く必要はないでしょう……

もし俺が帰るより先に艦娘たちの掃除が終わってしまった用に置き手紙をしておいたが食堂を見る限り掃除は終わったようだな。食堂の前にトレーラーを停め整理している艦娘の先頭にいる吹雪に駆け寄る。

「吹雪、遅れてすまなかった。掃除が終わったようですよ。よかった、総括ご苦労」

「……いえ。どちらに行かれてたのですか？」

「ああ、今説明する」

並んでいる艦娘に向かつて

「清掃ご苦労。これから、鎮守府内はきれいな状態を保つように。そして今から一人一セット布団を配る、その際にアンケートとも渡すので書いておくように。」

「！！！！」

「今後の説明を行う。ヒトキューサンマルより屋外で会食を行う、その際にアンケートを回収するのでもって来るように。」

「…」テヲアゲ

「手を挙げているもの、発言を許す」

「赤城型 1番艦 正規空母 ” 赤城 ” です。なぜ会食をするのですか?」

「理由は2つ。1つ目は、お前らが弱すぎるからだ。たくさん食って強くなれ。2つ目、食事はストレス解消ができるからだ。俺も含めてうまいものを食うべきだと判断した。

以上だ納得できたか?それともお前はあのまずい栄養ブロックの方が好みか?」

「つい、いえ。ですが私達は食事しなくても最悪資材さえあれば生きていけます、なのでわざわざ食事をしなくても……」

「さつきも言ったが食事はストレスを解消してくれる、お前らがどのようなストレスを抱えていて食事程度では解消できないかどうかなんか知らんが、あまり食事をなめるなよ。…強要する気はない。一応、栄養ブロックも置いておくからそっちがいいなら勝手に

に食べ。」

「…はい。わかりました、つまらないことを聞いてすいませんでした。」

「…強要はしないので各自自分の判断で行動してくれ。今から布団を配る食堂を出てト
レーラーの近くに一列に並ぶように、以上」

「「はっ」」

「始めるぞ」

「「はっ」」

” 鳳翔 ” 間宮 伊良子 ” は希望に満ちた目で食材と対自した。

たたき潰してくれるわ

「鳳翔さん、あの人って何者なのでしょうか？」

「ほんとです！」

「私に言われても。それより二人とも手を動かして、片付けはまだまだよ、間宮さんはカップを伊良湖ちゃんはスプーンをお願いね」

「鳳翔さんより器用でしたよ!!」

「おい、伊良湖話してないで手を動かせ」

ビクツ「は、はい」

数時間前の出来事です。私と間宮さん、鳳翔さんは提督に料理の手伝いを言い渡され食堂の厨房に集合しています。

私達は食事をしなくても生きていけます、なので前の提督には『無駄』と言われて食べることはもちろん作ることもできませんでしたが、でも提督は『全員分の食事を作る、手伝え』突然のことで訳が分かりませんでした。が、鳳翔さんは取り乱すように『なんですって』と大きい声で血走った目で提督を問いました。提督は驚いたように『貴様らは食事を作ることができるのであるだろう、違ったか?』と言いましたがなんで補給艦ではない鳳翔さんが呼ばれているのは疑問でした、速吸さんもいるのですがなぜ鳳翔さんだったのでしょうか? 黙り込んでいる鳳翔さんに提督は『料理は嫌いか?』と初めて聞く優しい声で聴きました。

『私は、…私はみんなのために何度もお願いしました、ですが、でも、作らせてもらえませんでした…』泣いている鳳翔さんは初めて見ました。

『俺は、食事が何よりも好きだ。うまいに越したことはないだろう。みんなのために作ってもらえないだろうか?』

久しぶりの、本当に久しぶりの料理がです。鳳翔さんはなんか目が据わっていて少し怖いですが…まあ伊良湖ちゃんもやる気みたいだし楽しみです。しかしなんで提督は

エプロンを付けているのでしょうか？ま、まさか作られるのでしょうか、男性の手料理なんていったいいくらかかるのでしょうか？

やっと、やっと料理ができます。前の提督の時は無駄だと言われ作らせてもらえませんでした。今回の提督は作らせてくれるみたいです…この際提督どうこうの話ではありません。みんなのために全力で腕によりをかけて作ります…はっ！赤城ちゃんにちゃんとやっておかないと！

「始めるぞ」

「はい」

「早速だが伊良湖と間宮は倉庫にある折り畳みの机と椅子を持ってきて外に並べらといてくれ。よし鳳翔やるぞ、まずは食材を運ぶ。ついてこい」

「間宮さん、なんでしようこの新品の折り畳みの机と椅子は」

「最近ここに置かれたようね」

「まさか…提督が？布団もくれましたし…」

「そんなことないわよ、きつと本部からよ。わざわざ提督が私達のためなんか…」

「…」

「そんな顔しないの、早く運んで鳳翔さんの手伝いをするわよ」

「…はい、そうですよね…」

「提督これはいつたい？」

「業務用の冷蔵庫だが」

「いえ、なんでこれがここに？」

「買った」

「…え」

「これから艦娘全員分の食事を作っていくから、大きい方がいいだろ？」

「提督が…ですか？」

「は…これからは俺は手伝わないぞ、お前らで作れ」

「そういうことではな…え、今なn」200人分の食事を用意するんだ話している時間はないぞ。とりあえず野菜を運ぶぞ」

「つて提督…はー、行つてしまいました。そうですねお話はあとです。今はみんなの笑顔のために！わあ、こんなにお野菜が。お肉もたくさん！あら？」

「やつと運び終わりました、意外と早く終わりました」

「そうね、鳳翔さんのところに行きましよう」

「はい！」

「間宮、伊良湖。ならば終わったか？」

ビクツ!! 「は、はい。終わりました」

「よし、お前らはエプロンを付けて炊事場の鳳翔の手伝いをしてくれ、俺もすぐ行く」
後ろから声を掛けられびつくりした様子の二人のところに食材を運び終わった鳳翔の
のところに行くように言っておく

「はい!!」

「ほーしよーさーんんん?!」

「な、なんですかこの量は?!」

「やっと来ましたか、お話はあとです。さあ手を洗ってらしい!」

「わ、わかりました。あ、これ鳳翔さんのエプロンです中に置いてありました。」

「ありがとう伊良湖ちゃん、始めるわよ」

「遅いぞお前ら、早くしろ！」

「「!!」」（手を洗って帰ってきたら提督が凄まじい速さでなすを切っている!）

「言つてなかつたな、今日はカレーだ。鳳翔はジャガイモと人参を洗ってくれ、間宮は玉ねぎをむいてくれ、伊良湖はご飯と寸胴鍋鉄のバケツみたいな鍋に水を入れておいてくれ。時間は待つてくれないぞ行動!!」

「「は!!」」

それからのスピードはすごいものでした。料理と言ったら鳳翔さん”の鳳翔さんが圧倒される包丁さばきに一切迷いのない効率的な行動、男性が料理をすること自体かなり現実離れしているのに提督は本当に全員分の食事を作るつもりなのでしょうか？

私なんか玉ねぎ向いてカレー混ぜるだけしか手伝えませんでした……提督の料理作っている姿かつこよかつたなー、いえ駄目よ変な期待しては駄目よ間宮！提督はイケメンで料理もできるきつと私なんか…ブサイク…見向きもされないわね…

提督がエプロンを付けているのは軍服を汚さないで私たちを見張るためかと思っていました、まさか私よりも料理がうまいじゃないですか！そして見るからに料理を作ることになれている動きです、これは普段から作っているのでしょうか？た、たぶんおいしいでしょう…くっ、なんか負けた気分です…

19:04

「て、提督。少しだけお時間頂いてもいいでしょうか？」

「どうした？」

「赤城 t y、赤城を含め会食に来ないものがあると考えられます。なので鎮守府放送で全体集合を考えているのですが、許可をもらえませんか。お願いします!!」

「…いいだろう、ただし”全体集合”は駄目だ。強制はしたくない」

「っ……………わかり……………ました」

19…05

「ピー…鳳翔です。皆さん聞いてください

……………

……………

……………

19…30

「…これ私たちが食べていいの？」

「すごいよ叢雲ちゃんカレーだよカレー!!」

「なんなのよあいつ」

「おおーいいねー、カレーだねー」

「久しぶりの食事ですね！北上さん！」

「鳳翔のご飯はおいしいから楽しみクマ」

「多摩は辛いのが嫌いだからあまり辛くないといいニヤー」

「間宮さんのカレーは初めてだぜ」

「筑摩よ食事はいつぶりじゃったか？」

「元帥様がいらしたときなので：6ヶ月前でしようか。」

「そうか、鳳翔と間宮のカレーなんて吾輩楽しみじゃ！」

「伊良湖さんもですよ、姉さん」

「そうじゃったな、伊良湖の料理は初めてじゃ！」

「姉さんが嬉しそうでしたです」

「ほら赤城ちゃん来なさい!!」

「…」

「赤城さん、行きましょう」

「いえ私はもう食事をしません」

「馬鹿な事言うんじゃないやありません！」

「もう、もう嫌なんです。みんなに迷惑はかけられません」

「赤城さん……鳳翔さんもういいでしょう、私が赤城さんのご飯は私が運んで食べてもらいます。」

「…わかり、ました。赤城ちゃん聞いて、提督はあなたのことを捨てたりしないわ」

「そんなこと、なんで言えるんですか！」

「提督はこの鎮守府の再建をすと言いました。提督の行った『鎮守府』は鎮守府だけでなく所属している艦娘のこととも含まれてます、提督は私たちも救ってください！」

「……もういいです聞きたくありません、ご飯はあとで食べます。加賀さんも早く食べるにいてください……」

19:35

「全員に行きわたったか？」

「はいみんな信じられないくらいうれしそうに食べてます」

「それはよかった、伊良湖もお腹空いただろ食べてこい。あとから来た奴とお代わりする奴は勝手にやるだろ」

「あ、あのいいんですか？提督が作ったって言わなくて」

「俺が作ったなんて言ったらみんな食べないだろ、それに男の料理なんて食べたくないだろ」

「そんなことないです!!男性が料理するなんて聞いたことありませんし、提督が作ったなんて知ったらみんな驚くと思いますよ!!絶対。言うべきです、いえ言いましょう。私が言いましょうか、いいですよ行つてきます!」

「わかったわかった後で言うから、今はみんなにおいしく食べて欲しいんだ」

「うー、わかりました。ちゃんとみんなに伝えてくださいね、喜びますよきつと」

「ああ、わかった。冷めないうちにお前も食べてこい」

「提督は…私、と一緒に食べないんですか?」

「俺はまだやることがあるから。あ、あと食べたいやつがいたら俺の分は気にしないでいいから配つてくれ。それじゃ」

「あー、伊良湖ちゃんこっちこっち!!」

「間宮さん、鳳翔さんお待たせしました。」

「あら、提督は？」

「なんかやることがあるとかで」

「そう、やっぱり私達とは食べてくれないのね…」

「そんなことないですよ、間宮さん。なんか本当にやることあつたみたいです」

「提督ここに来てから休んでいる姿見たことないですね、水上靴のこともありますが提督は本当に人間ですかね？」

「提督は私たちのために自分の身を削ってくれてます…」

「そ、そうなんですか鳳翔さん。確かに休んでいる姿は見たことないですが…」

「え、聞いてないんですか？」

「?」

「掃除道具も布団、畳も食材、机、椅子も提督が買ってくださいったのよ」

「え、!!」

「え、きいてなかったの！」

「そうだったんですか！なんで言ってくれなかったのかしら」

「なんで鳳翔さんは知っているんですか、提督が自分から言ったんですか？」

「いえ…伊良湖ちゃんこのカレーのお肉は？」

「え、鶏肉ですが…あれ牛肉じゃないですね」

「そうなの海軍カレーって牛肉なのよ、だからなんか理由があるのかきいたr」あーっわ
かりました、鶏肉の方がお安いからですね!!」

「…提督は決まりの悪そうな顔で『悪いなポケットマネーだと牛肉は苦しいから』なんて
いわれて……」

「うっ、提督すみません」

「どうしたの二人とも？」

「机とか運ぶときに、これは『本部からの物資』だろうと言ってしまつて。まさか提督の
配慮だったとは知らずに……」

「伊良湖ちゃんのせいではないわ、私が言ったことだからごめんなさい。あとでお礼を
言いに行きましょう」

「はいー」

伊良湖にみんなに言うように言われてしまった。しかし、本当に男の手料理なんてなんの需要があるんだ？知らないほうがおいしく食べれると思っただが…なんか俺嫌われてるし…まあいいか。

「やるぞー」

伸びをして気迫を込めて頬をたたき、海軍兵学校時代に料理をふるまったことを思い出した。組の時に兄貴や姉さんたちのご飯は俺が作っていたし…ああ思い出すのやめよう、ある種トラウマがうつ…

「だいじょーぶー？」

「びようきー？」

「しぬのー？」

俺はマンボウか！そんな簡単に死んでたまるか！いつからいたんだお前ら、ちようどいいし変なこと言った罰だちよつと手伝え。

「えー、やだー」

「めんどー」

「やすみをー」

あーそうか残ったデザート上げようと考えていたのになー残念だなーあーあ

「ていとくはやくしろー」

「そこでつつたてないでいそげー」

「おーーーっお!!」ゴツツ

すっ飛んでいった一人がおもつきし壁に当たってた…痛そう

まあいい手数が増えるのはありがたい。

この厨房の雰囲気は俺のやる気を引き出させる………と同時にあの修行を思い出す

…

屋外、会食会場

ガヤガヤガヤガヤ

思いのほか妖精との連携が取れて早めに作り終わってしまった、配るのも手伝ってもらうつもりだったのにあいつらケーキを頬張って俺の話聞かないし…

誰かに頼むか

「鳳翔、いるか？」

「っはい、提督どうさr」「提督！」

「！な、なんだ」

「私たちのためにいろいろありがとうございます！」

「？…俺は再建、鎮守府運営をしているだけだが」

「いえ、提督は前の提督とは違い私たちのことを考えてくれて…」「私達艦娘は現在の元帥になる前、10年ほど前まではとても人間として扱われなかつたんです。それこそ兵器、道具のような扱いでした…しかし、提督は私たちのために自信の身を削ってまで再建をしてくれます。それも私たちのケアも…」

「あー…：…：そうか。ま、まあみんなが嬉しそうでよかった、うん」

なんだこいつら、変だな（この世界で変なのは提督である）

「それで、提督何か御用があつたのでは？」

気が高まっている二人を横目に冷静に鳳翔が訪ねてきた

「そうだったな。ヨーグルトのケーキを作ったんだが数が人数分しかないのでアンケートと引き換えにみんなに配ってくれ」

「え?…まさか、提督が作られたのですか?」

「ああ、妖精が手伝ってくれたので早く作れたんだが。あいつらケーキ食うので頭がいっぱいで配るのは手伝いをしやがらない」

「「えーえー!!」」

ビクツ「!!なんだ、いきなり」

「よ、妖精がいるんですか?ここに?」

「手伝ってもらったって、どういうことですか?」

「あつ、これなら提督が水上靴を使えるのも説明がきますね!」

「なんの話だ?…提督として妖精と意思を図るのは当然だろ?」

「……はい、確かに提督適正は妖精の認識が絶対条件です。ですが近年、認識できるだけの人間も提督になっています。本来、提督業また鎮守府運営において妖精との意思疎通がないと私たちは力の100%を出すことができません。前の提督は妖精を活用せず私たちは妖精の加護、力がないまま出撃と演習、遠征を行っていました…。最近の本部の研究で妖精には懐く人間と懐かない人間がいることが分かって、主に腹に毒がないよ

うな善人によく懐くそうです。」

俺の知っている妖精は食べ物で釣ればすぐついてくるようなもんなんだが？

そこで俺は先ほどの三人の大声で注目を集めていることに気付いた…それだけならよかつたんだが…

「お前今妖精が見えると言ったか、意思疎通が可能とも」

「そうだが、何か問題があるのか？」

「ああ、嘘をついていなければな」

「嘘はついてないのだが？」

「黙れ!!私はお前のような奴は信用していない」

「そうか、信用するかなんて好きにしてくれ」

「おのれ貴様ー!!」

バシッ

「なんのつもりだ？大和型二番艦武蔵二」

「なっ!!」

先ほどから聞いていれば妖精と協力しただど？なめたことをぬかしやがって。提督なんて存在は役に立たないただのゴミだ、妖精が見えただけで私たちを奴隷のように扱いやがる。チツ、思い出しただけでイライラしやがる、なんで鳳翔たちはあんな仲良く話しているんだ。ああイライラする！なんなんだあいつ、私も演習に参加すればよかつた。クソ!!

もういい、私が追い返してやる!!

こつちの世界の妖精は変わってるななんて考えていたら急に武蔵が話しかけてきた。なんか怒らせることをしたか、と思つて記憶の中で武蔵との接触を探していたが怒鳴つた拳句殴られかけた。たかが艦娘のパンチなんてどうということはないので片手で受けたが……思つたより痛かつたわクソがとりあえず訳を聞いてやろう

「提督に対しての反逆は絞首刑だが……殺したいのであれば演習式の決闘という形で正式にかかつてこい。それとも何か？絞首刑をお望みか？」

「チツ、お前なんぞ必要ないさつきとかえr」「提督!!大丈夫ですか!?!?!」

「貴様らこいつは提督だぞ！な n」だとしても！だとしても人間に手を出しちやダメでしょ！！」

「いや、今日も言ったがお前らのような弱い奴の打撃なぞ。笑わせるな」

「お前はまだ私を馬鹿にするのか」

「ああ、そうだ。当たり前だろ。最も強い者の言い分が常に正しい」んだよこの世は、お前は弱者だ。」

「黙っていればお前は何も知らないくせに…」

武蔵の表情が変わった、先ほどの”怒り”ではなく艦娘本来の戦闘センスからくる”殺意”だ

「ハッ、面白い。飯は食い終わったか？屋内第一演習場に来いたたき潰してくれるわ」

…手加減できそうにないな

艦娘とは対深海棲艦特殊戦闘兵器である。

深海棲艦が海を犯し始めた時と同時に地球上には妖精が見える人間が現れた、妖精は強いエネルギーを持ち艦娘を作った。そして人間は深海棲艦に対抗するために艦娘を量産した、妖精が見えるものは艦娘と協力して海を守った。しかし、艦娘とは人間ではない。元の艦としての力を行使することが可能で砲撃や爆撃、雷撃などで攻撃を行う、もちろん扱う装備による力は生まれながら持っている。15万馬力もの力を持っているということになる、妖精がいなくても最大8万馬力ほどまでは可能である…

今日一人の人間は艦娘の打撃を片手で受けた

提督に手を挙げた武蔵は決闘を言い渡されたとき私は心配だった、水上演習にてなすすべなく一方的にやられてしまい提督の強さを自分の身で感じてしまったのでこのま

までは武蔵が危ないと思いつつ変わり果てた武蔵に声をかけることが出来ず演習場にゾロゾロと軽く百鬼夜行状態の先頭に立っていた。

しかし、水上演習とは違い屋内は水上靴を履かないので妖精の力の差が出ないから、妖精と意思疎通ができた提督としてさすがに武蔵には勝てないと思うのだが…

「さあ、拳を握れ。最後まで立っていた方が勝ちだ、強いことを証明して見せろ!!」
「…」

射るような視線で黙っている武蔵は殺意に満ちている。

「沈黙は肯定とみなす。長門！開始の合図を頼む」

「っは、はい。ただいまより屋内第一演習場にて、”武蔵”矢久佐提督の肉弾演習を開始します。勝利条件は相手の轟沈判定。開始合図は戦艦長門が担当します、空砲と同時に開始してください。……それでは開始!!」

ポカーン!!

空砲とはいえ戦艦の41cm連装砲の衝撃は演習場全体に響き渡った、鳳翔が心配そうな目でこつちを見ていた。自分の見方が目の前で擬装もつけていない人間やられるのはさすがに鳳翔がかわいそうなのでやめようと思っただが………

大変です！提督が武蔵さんに殺されてしまいます!! ああ、私が止めるべきでした。ですがあぁなつてしまった武蔵さんはもう私では止めることができません…前の提督を自首まで追いやったときと同じ顔です……私達艦娘の中でもトップクラスに肉弾戦を戦闘において最も得意としている武蔵さんは実際の戦闘でも誰よりも前に出て戦っているような艦娘さんです、艦娘の動体視力は人間より優秀ですしそもそも力の差が雲泥の差です……

「強いな、さすが戦艦といったところか」

「ほぎげ、さつきから避けてばかり。ハツかすただけで重心が崩れてるじゃないか!!」
ガツ、シュツ!

「チツ!!かすつてもねえんだよなあ!!」

高を括つてタイマンを申し込んだが……つえー

もはや拳が空を切った音じゃないだろが

長門の空砲のあと、音を置き去りにするスピードで迫ってくる武蔵を認識した次の瞬間のこと。迫ってきた拳は反射神経の域を超えてかわしたいや、かわせたの方が正しい。

俺は武蔵を侮っていた、さつき打撃がフルパワーじゃなかったのか？まああれがフルパワーだったとしてもどのみち一撃で死ぬだろうがな…ハハハ…やばいな、殴り合いで俺が押されてやがる。まじか…仕方ないか

「…手加減できそうにないな」

「ん？今な nゲホツううつ…ぐうう…ぐあ”あ”…つはあつ！はあ、はあ。貴様、何を
した?！」

「仕方ない、本気を出してやる。誇っていいぞ武蔵」

「ふざけたことを。…今、だって、頬から血が、出ているではないか!!」コヒューコヒュー

「そうだな、弱者と違ったがどうやら違うみたいだ」

「なんだ、謝るならさっさとここから出ていけ!!」

「ほぎけ、訂正はするがお前が負けることに変わりはない」

バチン!!

「?!なツ!!」

話にならないのもう殺してやろうと顔面目掛けて拳を振った瞬間、額と手のひらで
止められた。最もこれが初めてではないが、さつきとは違う…打撃が当たった瞬間に私

達の主砲を殴ったときのよ様な重くそしてとても固いそしてびくともしない!!
ふっ、なぜだ。なぜ笑いがこみあげてくる。なぜこいつは笑っていやがる。

「はははははは！いいぞもつと楽しもうじゃないか!!もつとだもつと本気で来い!!」
楽しい楽しい、久しぶりに本気で殴り合えそうだ!!今の打撃もよかった、早く重くそして的確に俺の顔を狙っている!!ああ、楽しい

提督と武蔵さんが演習をすると加賀さんがカレーを持って来るとともに教えてくれました。なんでも屋内演習場での肉弾戦だとか…

「かわいそうですね提督も、武蔵さんが相手なんて」

「そうですね赤城さん。しかし水上靴での戦闘を見る限り提督もそれなりに戦えるのではないのでしょうか？」

「いえ、武蔵さんはこの鎮守府で一番殴り合いが強いです。仮に提督が一発武蔵さん拳を当てたとて、武蔵さんはびくともしないでしよう。そもそも提督が水上で戦えたのは妖精の力を使っているからです、陸上では妖精の加護はありません武蔵さんの一撃で死んでしまうでしょう。」

「…赤城さんがそう言うのならそうですね……食べないのですか？」

「……加賀さん、お腹空いてないですか、なんならこれをたべ」鳳翔さんと呼んできますね」

「あー!!や、やめてください!!たべ、食べますから!!」

「はあー、私も怒られるので食べてください」

「…でも……」

「赤城さんの気持ちもわかります。ですが、前の提督はもういません。」

「今の提督は怒らないでしょうか？私が食べても」

「…わかりません…ですが食べていいと言ってくれました。今はこのカレーを食べて、そして提督が生きていたら感謝を言いましょう。」

「そうですね、一航戦の誇りが泣けます!!いただきます!!」

「あゝ、ああー!!まゝ、みやゝさゝ、あーん!!どどどど、どうしましょう!!提督が死んでしまいます」

「伊良湖ちゃん落ち着いて、大丈夫よ……きつと」

「ですが!ですが!!武蔵さんは…強いです、あゝ、ああー!!提督さんがあー!!」

「伊良湖ちゃん、慌てる気持ちもわかりますが、提督には妖精の…あれ?」

「どうしたん、ですか?」

「提督が妖精に懐かれてるのはいいとしてもなんで艦装が使えるのでしょうか?」

「?それは提督が艦装に妖精の力を入れて戦ったのではないのでしょうか」

「今この鎮守府にある艦装は艦娘専用のもので練習用の艦装しかないわ」

「?はい、なので提督は艦娘が使っていない艦装を使って戦ったのでは?」

「…提督が使っていた艦装覚えてる?」

「え、覚えていません。あつ、なんか新しそうでしたけど…?」

「艦娘専用の擬装はみんなボロボロでどこかしら汚れがあったりへこんでいたりしているわ、それに対して全く使われなかった練習用の擬装は埃こそかかっていたけれどもきれいだっただけです…だから提督が使っていた艦装は練習用の擬装じゃないかしら」

「そ、そんなことないですよ間宮さん。だって練習用の擬装は機動性能も加速性能も、とても戦えたものではないです。そもそもあの艦装は妖精の力が使えません!!」

「…あの艦装は妖精が乗っていませんわ…」

「なんでそう言い切れるのですか?!」

「提督は”妖精が手伝ってくれた”と言っていたわ。鎮守府に”提督”がいる以上鎮守府にいる妖精は提督に従う義務があるのよ、だけど提督はお願いをして手伝ってもらっているのよおかしくない? 私の考えはこうよ、提督はもともとほかの鎮守府にいてここに来た、前の鎮守府の妖精を連れて。」

「…しかし、妖精は本来艦娘の装備にいるものなのでそんな長い距離は移動できないはず…です」

”はぐれ妖精”ね」

「!!」

「可能性としてはありますけど…どうでしょう?」

「いきなりなんですか、お二人!」

「あら、驚かせるつもりはなかったのだけど…悪かったわね」

「ごめんなさいね」

「いったいなんでお二人がここに？赤城さんは会食場にいませんでしたよね？」

「ええ、加賀さんに持つてきてもらって。作ってもらったあなた方にごちそうさまとお礼を言いに来たのよ。とっつてもおいしかったわ！おいしく食事をさせてくれてありがとうね…？鳳翔さんはどこに？」

「鳳翔さんは観客席の前の列に行つてしまいました、それとあのカレーを作ったのはほぼ提督ですよ。」

「!?」

「男の人つて料理をするんですか?!」

「私はそうと知らずに…クツ、もつとしつかり味わつておけば…」

「(…まあそんな反応になりますよね)」アキレガオ

「…ハツ、でしたらこんなところにては駄目です。行きますよ加賀さん!!」

「…ですが、赤城さん。演習が始まつてもうすでに10分は過ぎてます…おそらく提督は…「そんなはずありません!!あのカレーを作れるような人間が簡単にやられるもんですか!!」

「そうですね赤城さん行きましよう!!」

「(…なんだこの人たち)」

「それでは私たちは行つてきます!!」

「私からもカレーごちそうさまでした、とてもおいしかったです」

「…行つてしまいました。嵐のような方たちですね」

「…はい。それより間宮さん”はぐれ妖精”というのは?」

「そうだったわね、”はぐれ妖精”はどこにでもいる妖精のことよ」

「?」

「提督になるための条件である妖精の認識は急に見えるようになるの、だからつてそんなの毎日国民試験するわけにいかないでしょ。だから本部が国中に妖精を放つたの、それが”はぐれ妖精”ね」

「…? 提督にそれがついてきたとして、なんで練習用の擬装だとわかるんですか?」

「もともとこの鎮守府に妖精はいなかったし提督が来てからまだ30時間も経っていない、以上より提督がお願いをしなくてはいけない上についてきたと考えられる妖精は”はぐれ妖精”ということになるわ。そして”はぐれ妖精”は基本的に鎮守府運営に必要な力を行使できないわ。」

「つまり提督は練習用の擬装で第一艦隊を倒したと…無理がありません?」

「…相当無理があるわ。でも、じゃあなんで武蔵さんとの肉弾戦演習で10分以上も戦

闘を続けることができるのでしょ

「!! 私たちも後を追いましょ! 急いでください間宮さん!!」

「ええ!」

くそ、苦しい。重くはないが的確に急所に当ててくる。…なのになぜだ? 楽しくてたまらない、こいつを殺せるからか? なぜだだがわからんが

「殺すまで勝手に死ぬなよ!!」 シュボア

「ハッ! 当てなきや殺せねえぞ!!」 ドスツボスツ

さすが戦艦!! カウンターの体感を崩す足を狙った一撃、並の人間なら確実に体が6回転はするような俺の攻撃を何もなかったかのように受けやがる!! それだけじゃない、た

だの脳筋かと思ったが意外と芸が細かい！フェイントをつかい体勢を変える隙をなくしているうえに視線から攻撃が読みづらい、だんだんカウンターの対策もされてきた。なんとってパンチのスピードが上がってきていやがる!!

……

……

……

「……」はあはあはあ

「……」はあはあはあ

「やるじゃねえーか、武蔵」はあはあ

「フツ、提督もなかなか、やるじゃないか、しかし、この、武蔵が、まける、なん、て
………」バタツ

「……誇れ武蔵、お前は強い」はあはあ

ボカーアーン

「……………これにて演習終了。矢久佐提督の勝利です!!」

私は強かった、誰よりも。でも海の上だけでは守れるものには限界があった、その日から私は陸上で戦えるように鍛えた。意味がないと言われ禁止されたこともあった、しかし私はやめなかった。独房にも入れられとこともあった『そんな鍛えたいなら』と言われ無理に出撃もされた、私は今以上に強くなりみんなを守りたかった…

提督は嫌いだ、自分は執務室で踏ん張り何もしくせに失敗はすべて艦娘のせいにした。理由は決まって『不細工』、艦娘はみんな聞き飽きていてそれでいて恐怖の言葉

だ。人権はもとより道具としての扱いだとしても、消耗品かのように……戦艦の私は火力で解体はされなかった、しかし比較的手に入れやすい駆逐艦は補給すらせずに大破したまま即解体……私ができることはなかった。

そう自分に言い聞かせて目を向けなかった。

そんな時に「駆逐艦」清霜が鎮守府に来了。清霜は強くなりたいらしく鍛えている私についてくることが多かった。しかし、仲良くなっても清霜は駆逐艦だ……そのうち勝てるはずのない出撃をされて大破して……『私にかまうな』鋭く強く圧をかけて言う。『カツツコイイー!!』私はあの時にもっと強く言っておけばよかったのだが、自分が初めて火力以外で見られてうれしかった。結局清霜は私と一緒にいることが多くなり気づけばまるで親子のような仲になっていた。しかし幸せな時間は長くは続いてくれなかった。

『武蔵さん！私出撃が決まったんです！』『ツゾク……そう、か』鼓動が早くなる、視界がぼやける、何も考えることができなくなる。

『行つてきまーす!!』『……ああ』今立っていることもつらい、清霜はどうなる？私はこのまま清霜を大破させて解体させてもいいのか？いや違う、今すぐ提督のところに行つて帰還命令を出してもらおう。ちゃんと説明すればきつとわかつてくれるはずだ。

『駄目だ』

『しかし、このままでは『いいかお前、提督は俺だ艦娘がどうなろうと俺の命令に従え』
『…』ダッ

『おい、お前どこに行く。とまれ命令だ』

その日戦艦が提督を半殺しにする事件が起きた

「武蔵さん!!武蔵さん!!大和さーん!武蔵さんが目を覚ましました!!」

「武蔵!!」

「……大声を出すな大和。心配をかけてすまなかつたな清霜」

な、泣き止んでくれ

「はー、なかなか早いお目覚めだな」コンコン

「提督」「ー」

「まあ、そんな顔するな。別に何も罰したりしないから」

「[「…」]」

「…あー…そうだな、またやろうな武蔵」

「…ふっ、おかしなやつだな。ああ望むところだ」提督!!」

長門の勝利宣言の後、武蔵を医務室へ連れて行く道中鳳翔にどちやくそ怒られた…

なんでも危ないだとか

戦艦の武蔵を素手で殺せるわけないだろうに『死んでしまいます』って、信用されてないなー俺

武蔵が提督と肉弾戦をして、まさか武蔵がやられるとは思いませんでしたが…現在武蔵の看病しています。

「清霜ちゃん武蔵は無事よ」

「でも、目覚ましませんが。このまま起きないなんてことも…」

「大丈夫よ武蔵がそんな簡単に死ぬわけじゃないじゃない。そんなこと清霜ちゃんも知っているでしょう」

「そうですけど…」

「大丈夫よ、なんとたつて私の妹なんですよ!!」

「…はい。そうですね」(苦笑)

「…うー、その優しさが辛いです…」

「にしても提督って何者なのでしょう?」

「そうね、まさか武蔵が殴り合いで…ましてや人間にやられるなんて」

「海上演習のこともありますし、というか人間かどうかも疑わしいです」

「さつき妖精が見えると言っていましたしもちろん艦娘じゃないですし、本当なら間違い

なく人間と言えますが…」

「もし人間だったとしても人間の身体能力の域を優に超えていますよね…」

「…わかりませんねー」

「あの時元帥さんが言っていたことと関係あるのでしょうか？」

「…『この戦争を終わらせる男だ』でしたっけ？」

しこたま鳳翔に説教された後にケーキをもって武蔵の様子を見に行ったが扉の前で
大和と清霜の話し声が聞こえたので戻り二人分のケーキを手を取った時「提督!!」

「私、赤城型 1番艦 正規空母 ”赤城”です。あ、あのカレーごちそうさまでした
!!」

「ああ、うまかったか？赤城」

「はい、とても!!」

「ケーキはどうだったか？」

「ケーキも提督が作られたのですか!？」

「妖精と一緒にだかな」

「でしたら、でしたら!!次は肉肉しいご飯がいいです!!提督の料理はきつとなんでも美味しいです!!」

「とっておきを作ってやるから楽しみにしておくんだな」
「でしたら他にもあれやこれや…」

「あー加賀、加賀はどうだったか?口にはあつたか?」

「……はい、美味しかったです。ごちそうさまでした。」

「お粗末様でした」ニコ!!

「っ!!……」ドキッ!!

加賀さんの後日談によると『急にかっこかわいいのギャップに襲われて轟沈寸前でした(赤城さんとの会話抜粋)』とのこと

b y ドウモ、アオバデス

せつかく一航戦の二人と話せたと思つたら急に顔を赤くしてどこかに行つてしまつた…

まあいいか、どのみちまたすぐ食堂で会うだろう。今は三人のところへケーキをもつ

ていこう「提督」

「怪我などは大丈夫ですか？かなりひどいと思うのですが」

「大丈夫だよ長門、この通りだ」ウデブンブン

「あ、そんな動かれたら傷に触ります」オロオロ

「…あ、ああ。すまない、だが本当に大丈夫なんだ心配しないでくれ」

長門ってこんなオロオロしてたっけ？

「しかし、本当に大丈夫ですか。相当なダメージでしたと思いますが…」

「どうしたんだ、長門。変だぞお前」

「提督に何かあつては困ります、どこも傷みませんか？」

「……」

「人間の耐久性は私でもわかります。まだ提督は動きまわるべきではありません、安静にしてください。お願いします」

「……あ、長門あつちを見てくれ」ユビサシ…ダツ

「え？あちらに何か？」

シーン

なぜか長門が気持ち悪くなっている…

俺の知っている長門はもつとこう、男気というかもつと強気だったはず…

これもきつとパラレルワールドのせいだろう、うん、そのせいだな、うん！

今はケーキを持つていくことを優先しよう、いつまでもケーキを両手に持つていけるわけにもいかないし、長門との会話でなんか注目を集めてしまったし「司令官!!」

「いや、すまん俺は今ケーキを持つので忙しい、それじゃ!!」 シュダツ

「え?!ちよつと、待ちなさいよ!!」

しまった叢雲だったか。後々めんどくさそうだな…

まあ逃げてしまった以上もういいか。

さて、武蔵は起きたか

〈数週間後〉

俺はあくまで軍人として日々の鍛錬を欠かさない、上に立つものとして当然のことであ

る。

4 : 3 0

起床

4 : 4 5

ランニング

トレーニング

5 : 4 5

シャワー

今日の責務を確認

6 : 3 0

食堂にて朝食

7 : 0 0

事務開始

おはようございます、吹雪です。

私は提督が変わり生活が一変しました。

前の提督の時は生活習慣といったものではなく、放送によって呼ばれ送り出されています。しかし、今回の提督は艦娘一人一人にローテーション表を配り、基本的には7時がお仕事の開始時間に設定されています：

なんといいですか、効率重視といった運営の仕方だと思います。だからと言って私達を酷使する方法ではないようで、ローテーションシヨン表を見る限り丸一日何もお仕事がない日が艦娘全員に用意されているようになっていますが、出撃も遠征もしないとなるといったい何をすればいいのでしょうか？

はい、今日私は暇です!!

しかしこのまま寝巻のままいてもしょうがないので、とりあえず制服に着替えて朝食を食べに行きます。

朝食の時間は6:30〜7:30の間に食堂に行けばいいらしいのですが、今は6:00なのでおそらく込み合っていることでしょう。

仕方ないのでまだ寝ている初雪ちゃんと幸せそうな顔で珍しく寝坊している叢雲ちゃんを起こします、これもネームシップとしての務めです…たぶん!!

「初雪ちゃん叢雲ちゃん起きてくださいーい!!」

食堂で出るご飯はとてもおいしいです、間宮さんと伊良湖ちゃんと鳳翔さんが所属している艦娘全員の食事を一日三食用意してくれます、鳳翔さんは別途で居酒屋の営業を許可されているそうです。今は開店準備中なので開店がとても楽しみです。：

（ ⊠ ⊠ ⊠ ⊠ ⊠ ）グヘヘヌヘツヌヘツ

吹雪「……叢雲ちゃん……あの、どうしたの？ さつきから気持悪いよ」

深雪「やめてよ今は美味しいご飯を堪能しているのに」

吹雪「そうだよ叢雲ちゃん、深雪ちゃんの言う通りだよ」

叢雲「ちよつと！ 私が気持悪いって何よ!？」

浦波「いや気持が悪いよ」ジトー

吹雪「なんでニヤついていたの？ 起きてからずっと上の空だったよ？」

叢雲「そつ、そうね話してもいいかしら」／／／

…話は今朝にさかのぼる…

珍しく朝早くに目が覚めてしまったわ。最近はおかおかの布団のありがたみを知って寝坊気味だったの…

今は5：00。今から寝ても起きるのが辛そうだから久しぶりに早朝トレーニングでもしましょうか。

キガエチユウ

5：10頃…屋外戦闘訓練場

あら、海上訓練器具もなかなか増えたのね…うーん、使い方が分からないわ…

的？よねこれ？ボタンがついてるわ…ポチ…ブーン…

的が動いて訓練範囲外から出て水平線のかなたに消えたわ

「…強く生きなさい…」

使い方もわからないし海上でのトレーニングはやめておきましょう、仕方ないからトレーニングルームでも行きましょうか。

5：30頃…屋内戦闘訓練場（トレーニングルーム）

海上訓練器具の使い方が分からないからこっちに来たけど…バシ！バシ！

誰かいるみたいね、気まずいわね。挨拶はした方がいいわよね？

仲がいい娘だといいいのだけれど…

壁からゆつくり覗き叢雲は驚愕する

なんと司令官がいたのである。もちろん叢雲は男性の汗が鎖骨に滴るエロスに感動しているわけでもなく、刀の素振りの一回一回に出る吐息に脳が破壊されているわけでもなく。

司令官が上裸（上半身裸）だったのだ

「誰かいるのか？」スタスタ

脳内に先ほどの光景が麻薬のようにフラッシュバックする、鍛え抜かれた上腕筋、鎧のような胸筋そして腹筋。それに滴る汗。

熱くなる体を静めることに集中していて、司令官が向かってくることに気づかない：

駄目よ私、男性の裸を見たなんてばれたら憲兵に連れていかれちゃうわ。この場を離れるのはおしいけど早く逃げましょう……最後にもう一回……チラ

「おっと叢雲じゃないか、おはよう。早起きとはいい心掛けだな」

「ング!!…あ、あら、いたのね」カー

「どうした、顔が赤いようだが？」

「ななな、なんでもないわよ、それよりあんた少しは隠した方がいいわよ！」チラチラ

「?そうか、俺は気にしないが」(上を隠すのか?)

「あ、ーっ!!わついは、私は用事があるからこれで!!」ダツ

「…なんだったんだ？」

…回想終了…

吹雪「だから血の付いたティッシュがゴミ箱に入ってたんだ…」

叢雲「鼻血が出たなんて言っていないわよ!!」

みんな「…」ジー

白雪「なるほど。いろいろ妄想していたら鼻血が出ちゃって、でも妄想をやめられなくてそのまま夢に持って行っちゃったと…」

初雪「私でもないのに寝坊なんて…」

深雪「司令官の筋肉!!」／／／

薄雲「叢雲もお子ちゃまですねー」

磯波「男の人の裸?!」ハアハア

浦波「もう司令官との距離を…」

叢雲「…黙って聞いていればー!!」

吹雪「あ、司令官!」

叢雲「!?」ビク!!

みんな「ニヤニヤ」

叢雲「あー——!!」

一通り叢雲ちゃんをいじったあと自分の部屋に戻ってきました。私以外は仕事があるので部屋に一人です。もちろんやることも終わらせました、掃除に掃除に掃除に掃除に……

任務がないときはいつたい何をすればいいのでしょうか？

えーつと。：散歩でもすればいいのでしょうか？

：まあやることもないのでそうしましょう。

寮から出て鎮守府本館に向かいます、食堂にはおそらく今日非番の艦娘が数人のグループで固まって話あっています。

朧ちゃんに曙ちゃん、漣ちゃん、潮ちゃん達がテレビ？を見ています。提督が外のこともちゃんと分かるようにと食堂に三台テレビを設置してくれました。主に駆逐艦や潜水艦、海防艦が集まるエリア。巡洋艦や軽空母が集まるエリア。戦艦や正規空母が集まるエリアに一台ずつ設置されています。提督は設置当時に要望次第で艦娘寮にも設置すると言っていましたが一休どのようなものなのか分からなかったのでいらぬ旨を伝えましたが今思うと暇をつぶせるのであってもいいかもしれません。

七駆のみんなはテレビに釘付けなので話しかけるのはやめておきましょう。

ほかのところでも行っ「あー！吹雪ー！！」

：ほかのところどころに散歩に行こうと思ったのですが、勉強をしていた鈴谷さんと教えている熊野さんに止められてしまいました。

「たすけてー！また赤点になっちゃうよー」

「でしたら少しでもまともに勉強と向き合いなさい！」

提督が新たに導入した授業。

軍事戦術学・一般教養学の授業は基本的に艦種ごとに分かれて鎮守府本館の部屋に集まり学びを得ます。もちろん中には意味がないと言う子もいましたが興味を持って授業を受けていた子の鎮守府内演習訓練での頭一つ抜けた好成绩の影響で今では所属艦娘ほぼ全員がこの授業を受けています。

私生活の変化である程度の身体とともに余裕ができたのでいろいろなことに手を出す子がたくさんいるので一般教養の授業にもある程度需要があります。

しかしある程度結果が出て満足をしてしまう子や軍事戦術の授業のみ受ける子がいたことに対して提督は対策で定期テストを行うことにして。テストの全体合計達成割

合を開示し偏差値を一定割合超えたものに褒美、次の学習内容に進むことが難しいと判断できる達成割合だった場合には再度やり直し、といったモチベーションの向上を試みています。

「吹雪前回成績上位だったでしょ？お願い勉強教えて!!」

「さつきから私が教えているでしょう」

「だって!!熊野教えるの下手なんでもん!!」

「…それは、あなたがおバカだからでしょう!!」

「ワー!!ギャー!!ワー!!ギャー!!」

「ワー!!ギャー!!ワー!!ギャー!!」

「…ハー…二人とも、落ち着いてください。喧嘩しても成績は上がりません、鈴谷さんはわからないことを教えていください。」

結局やることもなかったのでものまま鈴谷さんと勉強をして11:40。ぼちぼち食堂が混んでくる頃です。

「ありがとー吹雪!!これで次のテストはどうにかなりそうだよ」

「まったく、日頃からしつかり勉強していればこんなことにはなりせんのだよ」
「まあまあ、これで赤点はないと思います。次の分野はもつとややこしいのでちゃんと復習してくださいね。」

テストは今回で3回目。一週間に一回範囲はそんなに広くない上に勉強する時間はそこそこ確保できるのでよほどのことがない限りは赤点をとらないと思うのですが…
一週間で7時間分の授業でテストは月曜日固定、土曜日と日曜日はどちらが休みです。また月末で成績に応じて臨時報酬があるそうです。

食事は怠らない、数少ない艦娘との交流時間だからだ

12:00

食堂にて昼食

13:00

事務再開

15:00

演習監督

16:00

演習復習司会

「Hey、提督うー！となりいいですかー？」

金剛デース、いざいざ（一方的にポコポコ）がりましたが。私はこの人を信用することにはしまシタ。

「かまわないよ」

「ありがとうございマース！」

数少ない提督とお話ができる時間デース

「それにしても、数週間前の態度から考えられない変わり様だな」

少し遡つぽって、金剛姉妹部屋にて

「お姉さま！演習の時間ですよ！」

「…行かないデース」

「そんなこと言ってもコンコン」金剛、比叡どうした。演習の集合時間は過ぎてるぞ」

「!!」

「て、提督！すず、すみません！今行きます！」

「俺はいいから先に集まった子に謝れ、金剛も急げ」

「…行かないデース」

「お姉さま！」

「理由は？」

「？」

「行きたくない理由だ」

「…」

「無論今待たせてる子たちが納得できる理由なんだろうな？」

「…提督が戦えばいいデース」

「アホかお前たちの練度を上げることが目的の演習だ」

「…」

「そもそも俺が海を奪還できるならすでにやってるに決まってるだろ」

「そ、そんなのわかんないデース、私たちとやったときみたいに倒せばいいデース」

「…金剛、実践経験は？」

「…護衛、接敵と夜戦はありマース」

「深海棲艦の体液は見たことあるか？」

「？」

「何色だと思おう？」

「知らないデス、黒とか青とか化け物みたいな感じ」「赤色だ」

「…え？」

「人間、艦娘と同じ。心臓やほかの臓器もある。」

「…」

「見たことあるか？臓器が飛び出ても主砲を下げずに立ち向かってくる深海棲艦の姿を」

「…」

「硝煙の香りと得体のしれない生臭い匂いが混じった戦場」

「…」

「あたり一面が浮かぶ死体」

「…」

「それは化け物なのか」

「…」

「はたまた元味方なのか。」

「…私は…」

「お前が深海に沈みたいなら勝手にしてくれ。俺は強制しない、お前の意見は尊重してやる。ただ、軍の規律を乱すな。比叡、金剛と榛名を交代させる榛名を呼んでくれ」

「ま、待ってくださいサイ」

「なんだ」

「て、提督はなんで戦えるのデス？」

「俺は俺の大切なものを守るために戦う、海を奪還して艦娘を戦いから解放させる。戦うことしかないお前たちには分からないだろうがこの世界は捨てたもんじゃない」

「…」

私はその日演習をサボりました、ですが罰を受けるわけでもなく演習から外され自室でこもる日々。1週間ほどたったころ周りの子たちと精神的、練度的な差が付き始めて少し焦った自分がいまシタ。

『どうせ今回もロクな提督じゃない』『期待しない方が楽』

みんなは前を向き少しでもいい方向へ自分の力で変えようと努力してるのに…

でも私は提督やこの世界を信じてることができないデス

戦って？それで？私たちはどうなるの？

沈んだ味方が言ってた、その時は何も思うことは無かったデス。そのうち私も沈むと思ってたから、でも運がよかったのか悪かったのか生き残り、残り続けてる。私には何が残ってるのでしょうか？

考える時間はたくさんあった、けど、何も分からないデス。

そういえば提督が『戦うことしかないお前たちには分からないだろうがこの世界は捨てたもんじゃない』って言ってるまシタ。このまま埃を被って何もしいのは流石に一番艦としての名が廃れマース！当たって砕けるの精神デース直接提督に聞いてやりマース！

執務室前に立ち深呼吸をし小声で『緊張とは違った感覚がしマース』数分の沈黙とともに彼女は大声で「提督うー！」

「…ノックぐらいしてくれ。自室にこもり1週間か？どうした？」

「て、提督はこの世界が捨てたもんじゃないって言いまシタ」

「…？言ったな」

「私は戦う意味が分かりません、提督はなぜ戦わない私を解体せず鎮守府に置いているのデス？」

「…まずは戦う意味だがこの世界が好きだからだ、そしてお前を置いておく意味だが…」

「…」

「お前が大切だからだ」

「へ？」

「俺は轟沈はもちろん解体なんてしない。艦娘は国の宝だ、深海棲艦に対抗できる力は

限られている現状少しでも戦力は手元に置いておきたい。それに俺は艦娘が好きなんだ」

「…？な、なんで」

「艦娘がいなかったなこの国はなかっただろ。人間の見た目で人間の思考…力を持って生まれた」ただの女の子」。生まれていきなり『戦え』なんてあんまりじゃないか？同情してるわけじゃないが…」

「っ……………う……………」

国のため国民のため戦っているのに杜撰な運営体制、化け物扱いをされまともな支援は無し。これが艦娘の普通だと思っていた…あきらめていた、私も姉妹もみんなが。だから信用するのは味方の私たち艦娘だけ、『提督はいらぬ』総意で即決。長門をリダーに鎮守府の運営を始め軌道に乗って徐々に私たちは思い知った妖精の力は絶大であった。理解したところで提督がいぬ鎮守府では妖精の力は使えない…、私たちの限界であり非情な現実。

だから

予想もしてなかった、まさか一番理解されていないと思っていたのに。人間であり提督になった男が目の前にいる、この人間は私たちのことを物としてではなく艦娘として接してくれる。それがあまりにも嬉しかったその一言『ただの女の子』

「…な、泣き止んでくれ」

困った顔で言っている提督は私の目を見て話しかけてくれる。優しい顔に優しい目、他の人間が向ける蔑視ではないことに改めて感情が高ぶった。

「…ま、まだ戦う理由は分かりませン…テスガもう少しだけ提督の近くに居てあげマースー」

私は変われる、提督が好きだから。

「レディとして当然でしょ」 MVPキラー☆

「今回は譲ったけど次は私がMVPよ！」

電なのです。演習を終え復習会の最中です、提督が変わり演習という実戦の練習訓練が私たちの日課になったのです。遠征と違い練度の向上も経験も出来て今は鎮守府内交戦しか行っていないのですが、交流戦といったほかの鎮守府との演習も出来るみたいなのです。本格的な戦闘に近く実践でも活用できるので自分に自信が付き戦いに対しての恐怖心が薄くなった子が増えたのです。

響だよ。遠征の道具から私たちは艦娘として生まれ変わったと感ずることが多く

なったよ、それもこれも今の提督のおかげだね。運よく生き残れたけど何回死にかけたことだろう、今の提督に合うためにすべての運を使っていたのかもね。演習の作戦には事細かく指導してくれて演習は監督もしてくれる、復習会には司会で参加してくれる。数週間前の私はこんな生活が想像できたかな？きれいな会議室に提督と艦娘が話し合って終いには暁と雷が身を乗り出して提督にアピールをしてる始末。艦娘として生まれこんなにも平和な瞬間が訪れるとは思わなかった、、そろそろ私も参加しよう、2人に遅れは取れない

「提督。私も頑張ったよ、何か言うことは無いかい？」

17:00

事務再開

19:00

食堂にて夕飯

21:00

事務対応

22:00

事務終了

コンコン「提督、遠征の報告書を持って来ました」
こんばんは、神通です。食事を終えて遠征の報告書を書いています、、つづく

そこか

遠征の報告書作成は旗艦の役目です。自室で専用の紙に書いていきます、書き終えたら提出し口頭でも説明します。自分から提督に話しかける勇氣がない娘が旗艦の奪い合いを繰り広げてようやく確保した2人きりで話すことができる瞬間です、演習復習と違い2人きりです。たかが数分ですがその数分のため、2人きりになるため。この瞬間は時間が止まって欲しい誰もがそう言う、遠征経験の多い私は優先的に旗艦を任せてもらえて部隊のみんなから少し嫉妬されてます。

さあ、報告書も書き終えたので執務室に向かいますか。

コンコン「提督、神通です。遠征の報告書を提出しに来ました」

「入ってくれ」

夕暮れの空、西日が差し込む執務室に私と提督

「今回の遠征では…」

西日で照らされている凛々しい顔、私のことだけを見ている大きな目、一瞬も私から目を離さず一字一句聞き逃すまいと集中してるその態度。

ただただ私のことを聞いてくれることが嬉しい、そう思える。私達と同じ目線で私達に親身になって向き合ってくれる、こんなにも嬉しいことはないと言えよう。

「旗艦ご苦労、今回の遠征は少し航海距離が長かったが駆逐艦は大丈夫そうだったか？」

「はい、連続の遠征ではありませんし改修での性能向上もあります。誰も苦言を呈することはないと思います。」

「そうか。神通は何回か連続で旗艦だったな、そろそろ天龍か他の娘と変わるか？」

「…え？」

「うん？ いや、旗艦経験は自身にも繋がるだろう」

「、そ、そうですね、」

「どうした？」

「なんでも…ないです…」ズーン

「…何か考えでも？」

「せつかくの2人きりが…」

「2人？ 2人がどうした？」

「え？ い、いえ。」

「…ここには俺とお前しかいないんだ、そんなに言い辛いことなのか？」

「…」

違うんです、提督と2人きりの時間が無くなるのが嫌なんです。そんな心配そうな顔でこつちを見ないでください…

「…そうか、まあ相談ならいつでもいいからな」

「…」

あ、あーそんな悲しそうな顔しないで…でもごめんなさい提督、その顔興奮します。

「今日は何にしますか？」

「そうだな、A定食の献立を教えてくれ」

「A定食は…」

こんばんは、間宮です。食堂の管理責任を任せられて私は生まれ変わりました。一日にたくさんの娘が『ごちそうさまでした』と言ってくれる、これがどんなにうれしいことか提督は分かっているのでしょうか？

提督の手作りケーキを食べて以来あの味が忘れられず何度か再現を試みましたがどうにもうまくいきません、提督は『妖精が手伝ってくれたから』と言いましたが…はあ、最近提督のことを考えてしまって困ったものです。

それにしても提督はよく食べますね、一航戦の二人と同じ量ですからどんな胃をしているのでしょうか？ 私達とか武蔵さんとフィジカルで勝負できる体を維持使用するので当然といえば当然ですが、ますます人間離れしていることが明るみになりますね：ヒヨコ「B定食はですねー：

こんばんは、伊良湖です。間宮さんとともに食堂で皆さんの食事を作る日々、ありがたいことに補給艦の私もこの鎮守府で働かせてもらえます。一日三食のお食事2か3種類、間宮さんと協力して所属艦娘全員分のお食事を作っています。時間があれば鳳翔さんの居酒屋のおつまみの仕込みなどを手伝ったり、本当に毎日が忙しく楽しくてたまりません。

提督は毎食欠かさずご飯を食べます、補給艦の私たちが忙しい提督に会える唯一の間です。できればお話がしたい、提督にアピールをしたい、ただそれだけのために一日を過ごす日々。

いつも通り提督は献立を聞いてくれます、今日は出遅れて間宮さんですが遅れは取りません。間宮さんはたまにボーっとしてますがこの瞬間だけは絶対に逃しませんから油断できません、B定食の説明は私がしましょう。

「提督、来たよ」

「時雨か、入ってくれ」

時雨だよ、夕食を終え提督のいる執務室へ向かってるよ。白露たちの期待の目を浴びながら部屋を出て暗い廊下を歩いてるけど、ここも大分変わったね。提督がここに来るまでは夜の廊下を歩こうなんて思えなくらい暗かったし汚かったね。そして何より、提督に会うのにこんなにも気分がいいなんて考えられなかったな。あの頃に自分に今の生活と提督を自慢したいくらいだよ、なんてね。そうすれば少しでも…

いや、今は嫌なことは考えたくない。せっかく提督にー

「提督、来たよ」

もうそんな時間か？少し早いな、まあ時間に余裕はあるしいいだろう。

「入ってくれ」

「少し早かったかい？」

「規則時間の前に行動する癖は大切だ、いい心がけだろう」

「そうかい、ありがとう」

「俺もすぐ用意する、先に行つてくれ」

「そんな装備で大丈夫なのかい？」

「問題ない」

屋外演習場夜、海面を探照灯が照らす2つの人影。

1つは背丈が低く魚雷と主砲が見える、もう1つは背丈が高いが見えるのは腰に下げた一本の太刀。

「まずは好きにやってみてくれ」

「アハハ余裕だね、わかったよ……それじゃあ遠慮無く」

探照灯の光が消え視界が闇に包まれる、衝撃音とともに皮膚に伝わる水しぶき後^{のち}衝撃が体を走る。狙つた至近弾、海面は波を荒立て音を出す。静音に特化したエンジンは直線にこちらに近づく、荒れた海面に反射する曇つた月は光源の意味を果たさず反射物がない海面では音での索敵は意味を成さない。

近づいて分かる、背中からの一撃。

「稽古？」

「駄目かな？」

「構わんが夜戦なら川内せんだいの方が適任じゃないか」

「…提督に教わりたいたんだよ」

「そうか？まあ、いいだろう。あいにく俺もそんな時間が取れないから、そうだな…明後日のフタヒトヒトマルに執務室に来てくれ」

「わかったよ、お願い聞いてくれてありがとう」

提督は強いけど人間、人間の瞳孔は拡大しても私達艦娘の知覚には勝てない。探照灯はそもそも艦娘用の装備、提督は私を視覚で認識できない。アドバンテージとしては十分すぎる。それに私は奇襲用の特別静音エンジンを積んでる、反射物がない海面では正確に私の位置を捉えられない。初弾で私の位置を攪乱させて速攻背後に回る。

「もらった！」

間合いも十分、速度も出てる。

空振った

確実に当たる距離に居た人影はまだ当たるであろう距離を保っていた。困惑する余裕はなく提督が話しかける

「なぜ探照灯を消した？」

それは数メートル前にある人影からではなく、間違いない私の真後ろから

「後ろ！」

咄嗟に行動した回し蹴りがまたも空を切る、一旦距離を取ろうと一気にエンジンを回す

「そこか」

目の前の人影から出てきた手が私の首を掴む、反撃の用意はものの一瞬でできなくなった。水面に叩きつけられる私の背中が音を立てる、瞬きをしてようやく自分の頭に木刀が向けられていることに気付く。

「…参ったよ」

時雨の降参宣言。

なかなかいやらしい作戦だったな、視覚を奪うだけかと思ったが静音エンジンか。演習場に行けるように時間より先に来て、アイドル時でも少し回転数を上げて普段のエンジンを装う徹底ぶり。

「上等だろう、静音エンジンの使いかも立派なものだ」

「ありがとうでも提督にはばれている様だったけどね」

「近距離のフル回転は静音エンジンの意味ないだろ」

「それもそうだね、位置がばれたから距離を取ろうとしたんだけどね。それと提督はこの暗闇でも見えているのかい？」

「いや、じっくり凝らせばようやく輪郭が分かる感じだな」

「私もしつかり見えるわけじゃないけど、まさか距離を見誤るなんてね」

「そこだよ、俺が勝てた理由は」

「次は見誤らないよ」

「違うぞ時雨」

「時雨が見誤った人影は錯覚によるものだ」

「錯覚？」

「急に探照灯を消して俺を確認しようと凝視しほぼ背景の色と変わらない輪郭を知覚しただろ？瞳孔の急激の変化で暗闇に輪郭が浮かぶように錯覚したんだらう」

「まさか…狙ったのかい？」

「狙ってできることじゃないだろ」ハハハ

「…」

笑つてごまかす提督は間違いなく私の目を見て話している。見えてないわけがない、錯覚を利用した作戦も狙っているに違いない。提督の戦闘用の装備は海軍使用がほとんど演習監督の時でさえヘルメット被る堅物っぷり。紺色の軽装にプロテクターはなし、夜戦なのに五感の補助は何も持つてこなかった『俺もすぐ用意する、先に行つててくれ』の時点で私の負けが確定していた：

話を聞いて分かった提督なら探照灯を消した瞬間に私を取り抑えることもできただけ、深海棲艦を想定した手加減。姉妹総出で考えた作戦が提督という壁の前では意味を成さない恐ろしいリアル。

理解すれば理解するほど声が出ない大きすぎる壁。

でも…いつかは、提督と一緒に戦いたい。

その時は隣で、並んで見せる。今の姉妹みんな海を取り戻すと決めたから。

「それじゃあね、稽古ありがとう。必ず実践でも活かせるようにするよ！」

「ああ、期待してるぞ」

時雨が執務室から出て時間はフタフタサンマルを過ぎた頃、軽装にしたから楽だな。
一応この時間以降は事務対応の義務はないが…そろそろだったか

「夜戦ん、——！」

「…お前、今は何時だ？」

「?…夜戦の時間だよ…ね？」

「なんだよ夜戦の時間って」

「…え？」

「みんながみんな夜戦狂だも」提督の服いいね！闇に紛れ易そうだね！」

「…おい貴様、今日は夜戦しない。分かったら帰れ」そんなカッコなのに!!勿体ない！」

「これはさつきまで時雨とやったからだ」

「……………」

「なんだ急に黙って」

「…ねえ、提督。なんで時雨ちゃんとはできて私は駄目なの？」ハイライトオフ

「なにがしたいんだお前？」

「ハハハ、どうよ私の闇落ち顔！これで簡単に闇に紛れ込めるよ！」

「…なあ…：俺が艦娘を呼ぶとき決めていることがある」
「きゅ、急にどうしたの？」

”艦娘は名前で呼ぶ”無論覚えているよなお前と初めて話したときも言ったよな？
『なんで私の名前を知っているの』って」

「…あ、あときは嬉しかったなあ。初めてまともに名前を読んでくれたからね、しっかり覚えてるよ！」

「適当に作った話だがそうだったのか」

「あ、ー！ほんとに君は面白くないねえ」

「それで？要件は何でしょうか？神様さんよ」

「君って奴は、この世界だと一応私は元帥！君の上司だよ！」

「？」シランカオ

イラ「ま、まあ君なんか怒るほど私は馬鹿ではないのだよ」

「で？要件は？」

イライラ「…フー、落ち着くんだ。…ここに来た理由だが、君には次の海軍統率選挙で私の補佐をやってもらおうからそれを言いに来ただけだよ。」

「なぜ、俺なんだ？」

「君のいた世界は男女比が大体5：5だったはずだがこの世界だと大体2：7といったところだろう」

「この世界は性別が2つ以上なのか？」

「生物学的性別なら2：8だけどあれを女性と区別するのは私の女性としてのプライドが……」

「よくわからん。で、男女比と俺が補佐に選ばれたことになんの関係が？」

「まあ、簡単に言うとうと票稼ぎだ！君はイケメンだし、飢えた1割の票・光に集まる害虫の7割の票で私は当選確実だと思っっているのだけどう？」

「他を当たれ」

「流石に一般人を補佐にはできないよ」

「アホかお前の部下で探せ」

「君しかいないから頼んでいるのだろう」

「そんなわk……ツチ！」

「おお、ようやく理解してくれたかい。何なら海軍の男女比なんて1：1万ぐらいだし。珍しく察しが悪かったね、そろそろ私が来る事さえ感づいてた君がこんな簡単なことも考えられないなんて君に絶望しちやいそうだよ！」

満面の笑みで煽って来やがる目の前の川内の姿をしたこいつは、俺をこの世界に連れ

てきた張本人。合うたびに姿が変わるので本当の姿を知らない、というかこいつに本当の姿があるのか分からない。

「…まあ行くのはいいが、海軍統率選挙ってなんだ？」

「…つえ？…は？知らずに話進めてたのかい？」

「面倒だったから適当に話合わせた」

「すごいね君。元の世界になかったから知らないのも無理ないか。説明するに当たって、まずこの世界には元帥が4人いるんだよね。それで元帥どうしてイザコザが起きないように元帥の中でも一番の権力者を作ろうってなって生まれたのが海軍統率選挙。国民投票で一番多い元帥が当選後5年間で元帥間のリーダーを務めることができる、つとまあこんな感じかな？納得いってない様だね」

「リーダーの権限は？どんなことまでできる？」

「そこまで強力じゃないけど最終判断と責任が伴う感じだね」

「5年前から今までだれがリーダーを？」

「私じゃない東北の指揮を担当してる元帥だよ」

「お前じゃないのはなぜだ？」

「私が聞きたいよ！」

「お前はどんなことができる？神の力で当選できただろ？」

「私は神に近い存在だけど、できることに限界があるの。変装とかはまだしも人を操ったり国をひっくり返したりは無理、並行世界から君を連れてくるのがギリギリ出来ないくらい。」

「出来ない？」

「私も色々犠牲にしたからね」

「…お前についてこれ以上聞いても時間がかかりそうだな。人間に負ける神って何だよ」

「つえ？それ今関係なくない？」

「で？」

「で？ってなんだい？」

「いや、だから当選のための作戦は？」

「参加してくれるのかい？」

「…分かったことが3つある。まず1つ、協力次第で当選は容易であること。次に、お前が使えないこと。最後に、お前は俺に嘘をついていること。」

「失礼だn」「リーダーになったときの権限はどのくらいだ？」

「…」

「いかんせん独裁が続いたようだが？お前は何をしていた？」

「…」

「俺をこの世界に連れてきた目的は再建だけじゃないだろうか？」

「…私は生まれもった力がある、それは物理的に不可能なことでも可能にしてしまう。この世界はそんな人間があと3人いる、それが元帥。元々元帥は私一人しか居なかったけどいきなり世界が変わり私が管理できる範囲が減らされた、上手く行つてた艦娘への悪いイメージの撤廃も失敗し海軍の管理権限が剥奪。海軍統率選挙に落選してからこの世界は独裁政治早変わり、『艦娘は醜いもの』イメージは急速に拡大。現在のままだと海の奪還どころか国が侵略されてしまう。そこで—

「俺のメリツトは？」

「…は？」

「お前のエゴで俺が苦勞しなくちゃいけない理由は？」

「き、君ねえ「お前が弱いからあとから入ってきた奴なんかには負けたんだろ。世界をお前の思う通りにすることは、ただただお前は艦娘を救いたいというエゴだろ？」

「…」

「当選後権限の少しを俺によこせ、これが協力条件だ。無理なら協力はないと思え」

「…わ、わかつたよ。…それでいいから協力してくれ。」

勤務時間外に来やがったから少し高圧的にはなしたがあまりにも現状が酷すぎる、こ

いつも結構切羽詰まってるみたいだし。俺の協力は必須と見て良さそうだな、おそらく権限の譲渡は犯罪だがそれすら妥協する始末。海軍統率選挙の仕様がいまいち分らんが今はこいつに協力した方がいいだろう。

「で？なにか作戦はあるのか？」

「演説中に隣で笑顔を作っているだけでいい」

「？それだけか、まあ分かった」

「日程はー」「いや俺も演説する」

「え？なんで？そんなことしなくても当選は確実だよ」

「お前以外の元帥に認知されるためだ、少し喧嘩を売ろう」

「…多分君が思っているよりやばいと思うよ」

「とりあえず分かる範囲で元帥の説明をしてくれ」

「それじゃあ、前任から・・・つづく」